

# 緑の地球

## GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



ツアー参加者といっしょに汗を流して木を植えた、この子どもたちが未来の緑化をになう

### Contents

『緑の地球』100号を記念して .....	P 2
中国からのメッセージ .....	P 4
座談会“ 困難をひとつずつ乗り越えて ” .....	P 6
黄土高原ツアー報告 .....	P 12
関東ランチの「これまで」と「これから」 .....	P 14

2004.11

100

記念特集号

# 『緑の地球』100号を記念して

立花 吉茂 (GEN代表・花園大学客員教授)

田圃と林のない大地へ

早いもので、GENの山西省での植林にくわって10年が経過した。高見事務局長の依頼で専門家チームをつくって最初に大同へ赴いたのは1994年の夏だった。北京から大同への汽車に乗り込むのにまず驚いた。人々、人々の群れが駅前にたむろしていた。280キロの距離は数時間でいける時代になっているにもかかわらず、ガットン、ゴットンと一晩中走っていた。北京語と大同語はすこし違う、と聞いて不思議に思っていたが、このタイム・ディスタンスに納得した。

夜が明けてきて汽車は山西省に入っていたようだ。この年、農作物はよくできていた。トウモロコシが、行けども行けども茂っていて、立派な実がついていた。家が1軒も見えなくて「こんなに広大で大量に農作物ができていたら、豊かなはずだがなあ」と考えた。「いや、中国でも最も貧しい場所なのだ」と高見さんはいう。その疑問は汽車を降りてすぐに解けた。汽車からは見えなかった農家の家が無数にあったのだ。「こんなに大勢いたら、分け前は少ないわなあ」と納得である。

山西省北端の陽高県から万里の長城に上って北方をみると内モンゴルである。そこの気候条件ははるかに厳しく、農耕は不可能で住む人は少なく、牧畜の民は酪農製品を食べ、山西省の農民より豊かな食生活をしている。人口の過密が貧しい原因である。これが現実の中国の農村の姿なのである。

農村といえば、田圃と里山のある景色がわたしたちの頭にうかぶ。だが、ここ山西省は違っていた。延々とつづく畑と剥き出しの黄土と茶色の家々がつづくだけの農村だった。川もまた澄んだ水や、石や岩が見当たらず、黄色く濁った水が平らに流れているだけである。山には草が生えてはいるが、裸にちかい山肌で、それでも家畜が多数群れていた。

黄土が何メートルも積もった土地は、

地盤が不安定で、数十メートルも落ち込んでいるところが多く、雨が降れば崩れ落ちる危険がある。舗装道路が崩れ落ちている場所もあった。またヒツジが落ち込んで骨折したのか、悲しそうに鳴いているのも目撃した。こんなところで緑化ができるのか？ 現実の厳しさが身にしみてきたのが最初の1日であった。

土壌と気象条件

砂漠化した土地は雨量が少ないことくらいは誰でも知っているが、大同の宿舎をでたとき、道路の両側にはポプラが並んでよく育っているのを見て、植えたらこんなに育つのか、と思う人もいれば、なぜこんなによく育っているのだろうか？と思う人もいるようだ。私も悪い条件の天鎮県や陽高県を走っているとき、「何でやろうな？」と思ったが、木の根元を見て「なるほど」と納得した。それは道路面へ降った雨が両側の樹木の根元へ流れ込むように勾配がつけてあるのだ。これなら年間500ミリの雨でも2倍の1000ミリ降ったことになる。だが、これは道路だからいえることで、砂漠化した大地ではこうはいかないだろう。

黄土はあらゆる土壌の中でもっとも粒子が細かい。たっぷり水分をふくむと粘土状態となり半分乾くとレンガ状になる。とことん乾けば風ですっ飛んでいく。まことに始末の悪い土壌なのである。こんな土に穴を掘って木の苗を植え、水を与えて足で踏む。これでは苗の根は呼吸ができず、窒息してしまい枯れる率が高くなる。にもかかわらず、必ず足で踏みかためる。踏むのはやめた方がいい、と指導しても必ず踏む。後でわかったことだが、「毛沢東語録に書いてあるからだ」という。傾斜地なら水分が流れて移動するので呼吸困難にはなら

ないが、この平らな大地で、しかも黄土ときているのにこんな作業がずっとつづいてきたというから驚きである。時と所、種類と時期など、作業は変化せねばならないのに千篇一律にしようとするところがいかにも大陸的である。その後かなり改善されたようだが、まだ踏んづけているところが多いことだろう。

.....

夕立は馬の背ひとつ、と日本ではいわれる。山の多い日本では当たり前のことかもしれないが、地平線の広がる大地でこんなことがあるのに驚いた。山西省北部は夏に雨が降る。その雨の降り方は日本の春雨のようなおとなしいものではなく、かなりのどしゃ降りである。その雨が何の変化もない大地に右と左で降ったり降らなかったりするのである。雨が降ると農民は自分の畑を見にまわる。隣の畑はどしゃ降りなのに自分の畑は1滴も降っていないのを見て天を仰ぐことになる。

降水量のデータがこの広い大地に1か所しかないのでは、植樹の地割りが決められない。そこで小学校でデータを集めてもらうことになったのだが、少なくとも10年の蓄積がないと信頼度が落ちる。黄土高原の緑化は、まことに気長な仕事である。このデータが「馬の背ひとつ」を見定めてくれるのは、いったいいつのことだろう。

環境林センターの建設

GENが大同へ入り込んで3年たった



環境林センターでツアー参加者を案内する立花代表



自然林の発見が、GENの緑化協力で新たな可能性をもたらした

ここでは、まず家畜の侵入を防ぐため防護柵作りと、苗場からスタートした。ここには李向東という良い技術者がいた。彼は接ぎ木などでもできる器用な男でかつ、熱心な植物愛好者なので、私は彼に期待していた。

植栽計画の次は、園の周囲の囲いである。とにかくグレーズング（放牧）の被害が甚だしいからである。

ころやっとセンター建設の必要性が認められ、実現にむかって動き出した。ここは、緑化樹の苗木の育成、気象条件の測定、適地適作の樹種の開発、土壌浸食や基礎研究とともに緑化技術の指導者育成などの多目的センターである。これが完成すれば、日本側のワーキングツアーの宿泊、勉強、作業もできることになる。その建物はすでに建設がはじまっていた。

翌年（1995年）建物は完成し、7ヘクタールの土地と8人の職員が決定して入り込んでいた。その後、土地問題や人事の変更などのほかに、日本では考えられないようなことなど、いろいろの難題が出現して、浮き沈みしながらもなんとか、目的を果たしつつ現在に至っている。

#### 霊丘の植物園建設

98年に緑化のための植物園が霊丘県に建設されることになった。植物園の候補地探しは、高見さんと遠田さんが7か所も巡り廻って最後に見つけたもので、約87ヘクタール、海拔900～1,300メートルの高低差のある理想的な場所であった。太行山脈のふもとで、黄土はきわめて浅く岩石の露出した場所であり、植物は繁茂しやすいとみえて上の方には天然林があり、リョウトウナラやハシバミなどが生えていた。

高見さんが苦労して入手してくれた地図をもとに、植栽計画を作った。

1. 自然の遷移を完成させる自然植物園
  2. 耐乾樹種導入などの有用植物園
  3. 教育、技術者養成などの人材育成の植物園
- などの多目的総合植物園である。

予算がないから痛い刺のある植物で困った。翌年には鬱蒼と草が生えたのには驚いた。野山に家畜を放さないのは日本国ぐらいのもので、森林復活作戦にはどの国でもこのグレーズングに悩まされた。人口が増えて草原の国も過放牧で、良い牧草が減って毒のある草だけが増えているケースが多い。大同周辺は無理やり農地になっているから何も植えていない場所はアツという間に家畜の団体が侵入してくるのだ。

次は苗場作り、そして園内管理道路作りである。苗場はすぐにできた。翌年には、李さんはどんどん種子を集めて蒔いた。私の指示したドングリやハギの苗はどっさりできた。そして園内の緑は着実に増加しつつある。植物園建設は100年の計である。大阪市大の植物園は50年経ったがまだ完成していない。ここ霊丘の植物園もまだ緒についたばかりだ。完成は私たちがあの世から眺めることになるだろう。

#### 適地適作

黄土の気候、風土に適した樹種はまだ導入されていない。山西のあちこちでたくさん見られる、ポプラやヤナギは元来川辺の植物である。こんなものしか定着できなかったのである。それを乾燥した山へ植えるのだから、一向に緑化が進まないのも当然である。表土が日本まで飛んでいってしまうから、せっかく西から種子が飛んできて、また野鳥が種子を運んできて落としてくれても、なくなってしまうのだ。現在2種類のマツをメインに植え、山に残っているニレの仲間や緑化用のマメ科の低木などをつかっているが、これでは不十分である。世界的視野で集め

て試さなければならない。植物園はこんなことを解決するための場所なのである。それには人材が必要だ。現地優秀な人物があらわれ、教育、実習がすすむと、政府中央に引き抜かれてしまう。日本人で「我こそは」という若者が現れてほしいものだ。

#### 砂漠化地域の緑化が大切

天然の太古からの砂漠に木を植えることに私は賛成ではない。それは地下水の水収支がまだはっきりしていないからである。地下水を使いすぎて首都北京は大変なことになっている。黄河は干上がり、ダムは田畑と化し、オリンピックは間近に迫っているからだ。

乾燥地では地下水位の高いところにオアシスができる。その周辺には人が住むことができる。そのあたりに植林すれば木は育つが、多くの水が消費される。植物から蒸発した水は雲となって地上にふりそそぐが、乾ききった地下水位の低い砂漠に降ったら、果たしてオアシスの水の量は増えるだろうか？ 地下へ浸透するまでに蒸発して遠くへ飛んでいってしまうのではないだろうか？ このあたりのはっきりした根拠がまだないのである。

昔、間違いなく森林だった地域が開発されて森林がなくなり、砂漠化した場所はあちこちにたくさんある。植樹はまず、こんなところからはじめるべきである。砂漠緑化は自然破壊だ。「人工的砂漠化地帯」の緑化が最優先されねばならない。これが私の持論である。

\* \* \* \* \*

「植物を育てる」は99号で終わらせていただきました。長らくのご愛読感謝いたします。



## 『緑の地球』がむすぶ絆

武 春 珍 ( 緑色地球ネットワーク大同事務所所長 )

錦秋10月実りの季に、貴誌創刊100号と知り喜んでいました。この機会を借りて、謹んで貴紙に心からのお祝いを申し上げます。また長年にわたって「緑の地球」に心を寄せ、支援してこられた日本の各界の人士に、最上の敬意を表します。

「黄土高原緑化協力活動」とともに13年を過ごして、「緑の地球」も創刊100号を迎えました。緑の地球ネットワーク(GEN)の会報として、「緑の地球」は会の活動ニュースを伝える窓口や、会員同士の意見の交流の舞台であるだけでなく、私たちが日本のGENを理解するための重要なチャンネルでもあります。

私は緑色地球ネットワーク初代所長の祁学峰さんのエッセイ、『忘れがたい平城郷』(「緑の地球」44号・96年3月)を読んで「緑の地球」を知り、文中で高見事務局長と“知り合いに”なり、黄土高原の山深い地に苑西庄という“飲み水が油ほど高い”貧しい村があることを知り、黄土高原緑化協力活動に感動し、惹きつけられたのでした。この後の7年間に私は毎号の会報で、高見さんや立花吉茂代表、遠田宏顧問、さらには日本の植物の専門家や友好の人士が黄土高原の緑化について検討する文章を読み、宮下利江さんや大勢の熱心な会員が講演や集会に参加したとの記事を読み、『協力者のお名前』欄にずらっと並んだ協力者名簿を読みました。これらによって私たちはGENをより深く理解し、さまざまな造林技術や考え方を学ぶことができただけでなく、会員1人ひとりの気持ちを知り、黄土高原緑化のために尽くす行為に感動させられたのでした。

「緑の地球」はまた、大同市の歴史や地理、気候条件、生態環境の状況を紹介し、中日黄土高原合作緑化の大きな出来事を掲載しました。環境林センターや霊丘自然植物園、「カササギの森」実験林場の建設の困難や喜び、中日両国民が大同の農村で手を携えて緑

化協力活動に参加した情景……。10年以上にわたって、「緑の地球」は大同をいろいろな角度やレベルから紹介し続け、緑化活動の状況を宣伝することを通じて、より多くの有識者の関心・支持・援助・参画を集め、引き寄せることに、力を発揮しました。

目下のところ黄土高原合作緑化活動は人に誇れる成果を得ています。高見さんは中国政府から「友誼賞」を、中華全国青年連合会から「母なる河を守る行動国際協力賞」を相次いで受け、当時の国務院朱鎔基総理と胡锦涛総書記と接見しました。しかし黄土高原の気候は劣悪で、毎年のように襲う旱魃などの災害が貧しい山間部にさらに貧困と教育の遅れの原因を積み上げ、私

## 高見邦雄さんのこと

緑の地球ネットワークの会員のみなさまの献身的な活動と、10年余にわたる山西省大同市の植林事業への心温かい援助に対して、この機会を借りて感謝の意を表します。また、会報「緑の地球」100号発行に当たり心からお慶びを申し上げます。

1992年の秋、高見さんと日本代表団が、渾源県西留郷の龍首山で、当地の人たちと一緒に植樹活動に加わりました。日本の参加者はみな、秋風が砂塵を舞い上げる中、汗にまみれて3時間あまり、率先して働きました。

その日の夕方、恒山飯店で交歓会をしましたね。日中の友人たちは大いに親睦を深め、心ゆくまで歓笑しました。このような場で語りあいながら、人びとが緑化への理解を深めるのを見て、私は大変敬服したものでした。

1995年の晩秋、渾源県が恒山緑化・恒山森林公園建設の活動をおこなった時、高見さんも私たちと一緒に活動しました。毎日朝8時から山道を登りは



たちの合作緑化活動を長期的な事業にしてしまうのです。

「緑の地球」の100号は、ひとつのエポックの記念であり、また一里塚であるとともに、さらに新しい歴史の出発点でもあります。喜びと誇りであると同時に、一種の鼓舞と鞭撻でもあります。私たちは、「緑の地球」とともに、みなさまと一緒にさらに大いに努力をしたいと願っています。

「緑の地球」がますます良くなりますように、心からお祈り申し上げます。

2004年10月26日

温 増 玉 ( 元渾源県林業局長 )



じめ、空腹になればパンをかじり、のどが渴けば水筒の水を飲みながら、午後2時まで活動しました。高見さんは文句も言わず、毎日楽しく、喜んで活動していました。高見さんが真剣で責任感が強く、そして誠実で温厚な、本当に良い友人であることを、その時私たちは改めて認識させられました。

1994年の夏には渾源県の国営苗圃で交流学習会を開きました。日本の技術者1人が国営苗圃の技術員1名に付き添い、育苗の過程を対話と活動を通じて学習しました。広葉樹の育苗で土鋤き、整地、畝作り、筋まき、畝踏み等を、針葉樹の育苗では施肥、整地、苗床固め、下植え、覆土から有機肥料散布まで一連の作業をおこない、各工程

の作用と目的も学びました。

学習は非常に真剣で緻密でした。この活動中、資金、物資、人材の各面で国営苗圃に大変大きな支持と援助をいただきました。今でも私たちは次のように言い伝えています。

“日本友人品德高、遠征万里来育苗、(日本の友人は人徳高く、万里を遠征し苗を育てにきた)

給銭、給物留精神、緑化地球代代高。(資金や物資を供給し、精神を刻み留めた。地球緑化は代代発展することだろう。)”

1996年の夏、高見さんと代表団が渾源県吳城郷のアンズ基地を視察したとき、私たちの説明を詳細に聞いたうえで提案と意見をしてくれました。それにもとづき、各種の改善がなされました。また、この視察は渾源県の植林事業を大いに宣伝し、省や市当局にも影響を与えました。省や市の林業主管部門はこの緑化プロジェクトを重視し強く支持するようになり、渾源県の南北丘陵各100里15万ムー(15ムー=1ha)の経済林帯の大枠建設も促進されたのです。このプロジェクトは単に生態環境を改善したのみでなく農民の収入を増やす役割を果たしました。

1996年の晩秋・初冬の頃、高見さんは渾源県に滞在して私と一緒に銀洞梁、老君殿、馬崇梁、龍山梁、四大万畝、生態林建設区にまで入り込み、渾源県の植林事業の現状と発展の見通しについて詳しい調査をしました。

高見さんは現場に行くといつも樹冠を見上げ、樹の根元をなで、土を調べ、海拔を計り、気候を質問し、虚心に学習し科学技術を掌握しようと努めました。あなたこそ真に林を愛する人で、植林事業の功労者であると確信します。

昔をふりかえるといろいろなことが昨日のことにまぶたに浮かびます。渾源の植林事業の現場にはいたる所に高見さんの足跡が留められ、汗が染み込んでいます。また、あなたの地球緑化を熱愛する精神は私の心に深く刻み込まれています。

これからもすべてが順調にいきますようにお祈り致します。

2004年10月

## 発展をささえたもの

王 黎 傑 (東方之星綜合企画有限公司副總經理)

私は高見さんとは30年余りのつきあいの「古くからの戦友」で、お互いによく知っていました。それで高見さんが1992年に中国で緑化活動をはじめたとき、通訳として私も黄土高原での活動に加わるようになったのです。

活動をはじめたころは本当に大変でした。高見さんと一緒に大同に調査に行っても、現地の関係部門は調査や見学をなかなか許可してくれません。一番困ったのは、日経新聞の鹿児島島樹記者が大同に取材に行ったときでした。取材ということですから警戒されてしまったのです。鹿児島さんの取材目的と意義を説明するために、何度山西省と大同市の関係先に電話したかわかりません。すったもんだのあげく、大同側はやっと取材を受け入れてくれましたが、大同のマイナス30度の寒さにぶるぶるふるえながら、この事業がうまく進むかどうか、私は少し疑問を感じていました。

高見さんにこの活動に誘われたときのことは今でもよく覚えています。ある日突然電話がかかってきて、北京の紫竹院公園のゲート前で会う約束をしました。高見さんに会うのは2、3年ぶりでした。その日約束の場所ですいぶん探しましたが高見さんが見つかりません。当時は携帯電話もなく、連絡が不便でした。私はすっかりあせってしまいました。その時、誰かが私の名前を呼ぶのです。振り返って見ると、特大のザックを背負って、真っ黒に日焼けした人が笑いながら「あなたは何分も私のまわりをうろうろしていたよ」と言いました。私は本当にびっくりしました。私の覚えていた高見さんとまるで違っていたのです。変装していたんじゃないかと思っただけでした。

1974年に高見さんと知り合ってから以来、彼のとなり、特に物事をやりとげようとする精神力は、私に強い印象を残しました。この精神力があれば、どんな困難も克服して、不可能と思われる



ことでもやりとげられるでしょう。私が今日まで高見さんと共にやってこれたのも、その精神力にはげまされたからにほかなりません。特に、この事業をはじめたころは、この力が私にエネルギーと希望を与えてくれました。それで私たちは一つずつ困難を克服し、今まで進んでいくことができたのです。

大同の緑化事業は飛躍的に進展しました。育苗センターもできました。関係機関との連絡もうまく通じて、政策上の障碍ももうありません。技術者は失敗から貴重な経験と教訓を得て、仕事の効率もよくなりました。すべてのことが、思っていたより迅速に進んでいます。ですが、中国の名言に「万里の長征の一步目を踏み出したにすぎない」という言葉があるように、高見さんが満足するにはまだ遠いようです。彼から見れば、世界には「ベストは存在しない、ベターがあるだけだ」ということなのでしょう。中国に「国をとることは難しいが、国を守ることはもっと難しい」という古いことわざがあります。高見さんは「守る」人ではありません。彼はきっと地球環境改善のために戦い続けるでしょう。

高見さんの友人として、私は大同の緑化のために微力を尽くしたいと強く希望します。同時に、もっともっと多くの人たちが、美しい未来を築きあげるために、緑の地球ネットワークに入ってこられるよう願います。

緑の地球ネットワーク会報の創刊100号発行に際して、以上をもってお祝いのことばといたします。

## 『緑の地球』100号記念座談会

# 困難をひとつずつ乗り越えて……

【参加者プロフィール】(発言順)

石原忠一さん：GEN顧問。92年緑化協力団団長。NPO「自然と緑」代表。

川島和義さん：GEN世話人。地方公務員。

竹中 隆さん：GEN世話人。マーケティングコーディネー

高見：石原先生は92年に、最初の緑化協力団の団長で行っていただいて、そのときに20年つづけると繰り返しておっしゃいました。



92年緑化協力団。前列右から3人目が石原さん

石原：えらいもので折り返しを過ぎましたね。20年といったのは、生き物というのは、はじめなかなか動きが見えないけれど、10年、15年たってくると、コミュニティというが群衆として見えてくるということがあります。

92年という年は大事な節目でした。リオサミットがありましたね。それより先に森林問題のシンポジウムを開いて、アジア一帯について論議をしました。水と気温に恵まれているのに、20世紀は侵略と破壊と略奪にあり、その傷跡がいまだに残っている。そんな中で中国に行こうということになった。

中国の資料を探すと、山西省の資料だけがない。あそこに手をつけたらえらい目にあうというのが専門家たちの常識でした。だから、もっと砂漠の中にはいって、砂漠に緑だという、いまから見れば問題ですが、そんな動きがありました。生態系がわかっていないというのは大変な問題です。

まず太原に行き、それから五台山を越えて北へ行くと、少しずつ植生が変わってくる。厳しい状況でした。とくにヤギの放牧。緑を食べ尽くすのはわかっているけど、それで生活しているからやめられない。そんな状況をみな

ター。

有元幹明さん：GEN副代表。元地方公務員。

長坂健司さん：元GEN世話人。農業ベンチャー勤務。

進行：高見邦雄GEN事務局長

文責：編集部

が恒山のふもとで寝起きして悠久の歴史を感じているうちに、せっかく来たんだからせめて20年、断固としてここを動いたらだめだと何回も自分自身にも言って聞かせた、そんなことがありました。

その後、いろいろ困難がありましたね。阪神淡路大震災、9.11、SARS。けれども、地に着いた指針をもち、中国の民衆と友人としていっしょにやっていける状況になっていることは、とても幸せなことです。

川島：92年にこの活動をはじめかなり前から、地球規模で環境が大きな問題になってきていました。70年代は公害でしたが、もう少し大きな規模で、先進国がどんどんエネルギーや資源の消費を増やして、それが環境に影響を与えている。そこで92年にリオサミットがあって、環境の問題がようやく取り組まれはじめた。期待もあったし、一方で危機感もあった。

中国はそのころこれから経済発展していくところでした。日本はもう自分で変わっていくのはむずかしいけど、これからというところでは違う道があるのではないかと、そこから学ぶことで自分たちが変わっていけるのではないかと意識でかかわってきました。

何度か大同にも行きましたが、当時の問題意識からして、じゃあいまだどうしたらいいのかというと、あまり見えてない。むしろ、年をとってきたせいか危機感が薄らいできた。しょうがないなという感じになってきていますね。竹中：私をはじめて行ったのは94年、最初の小学校付属果樹園ができたときでした。船で天津に着いて、バスで北京に出て、北京駅のあの群衆は鮮明に覚えていますね。

豊丘県ではじめて果樹園をつくると

10月19日、GEN事務所にて

ここで、精いっぱい接待でしようけど、砂糖水を飲ませてもらいました。村の子どもといっしょに木を植えて、大人は全部周囲で座って見てるんですよ。中国語のできる団員が聞くと、「おまえらいくら金もらって来たんや」というんです。「いやいや、ボランティアで来ているんだ」というと、じゃあ水汲みでもしようかと腰を上げる、そんな状況でした。

その年の秋に行くと、労賃をつかって学校ができていました。感激しましたね。古い校舎はね、窓の障子紙が破れて、石炭を買うお金もなくて、子どもがありがたの服を着て寒さをしのいで。春がそういう状態で、秋には新しい校舎ができてた。あれがひとつの原形になりましたね。



有元：92年にね、「中国で木を植えませんか」という話を高見君から聞かされたんです。私は95年に定年退職ですね。定年後の自分の生き方という問題と、中国で木を植えないかという話が、ピタッとあった。よっしゃ、その話のるわ、と約束したんです。

いよいよ定年をむかえた直後のツアーに参加しました。

夜行列車で陽高の駅についたのが朝の6時頃。寝台車のカーテンをあけた



ら、何十キロ、百キロ以上、木が1本もない。こんなところへ来たんだ、というのが第一印象でした。それから、環境林センターの起工式に、団長として参加した。ここにセンターをつくるという礎石を埋めるんですね。村人もきて、音楽じゃんじゃんならして。強烈な思い出になっています。

この緑化協力事業はせめて100年スタンスと位置づけています。来年の春には孫を連れて行って、おじいちゃんはこのことをやると、孫の世代に繋がりたい。孫がまた孫を連れて行けばいいなと、そんな気持ちでこれからも関わっていきたくと思っています。長坂：僕は大同にはあらためて数えてみると4回行ってます。最初は大学3回生の春に、卒論の材料探しをかねて、軽いノリで参加したんですが、その次の春も夏も行きました。なぜかという、いままで出会ったことのないような人たちに出会えた。年齢も違う、いろいろなバックグラウンドをもった人たちですね。日本人も、中国人も。そういった交流に刺激を感じて、4回も参加したのかなと思います。

僕はいま農業に関係した仕事をしてますが、GENに来る前は、銀行とか国連とかで国際開発の仕事がしたかったんです。それがGENに入って、農業とか林業とかをベースにした方との関わりができて、影響を受けました。それを考えるとやっぱり、人との出会いが大きかったと思います。

有元：私はいま定年から10年になりましたが、何やってんねん、いや、中国で木植えてんねん、と言えるのがね、これがいいですよ。

石原：しかもこの木はね、沙漠へ緑を強引に植えて生態系を乱してるのと違いますからね、それがやっこの頃みんなわかってきたんじゃないかな。

川島：緑化というのは生態系の回復だから、素人が闇雲に変な関わり方をしてはいけない。GENは素人ばかりではじめましたから、不安があったんです。それで日本で種子集めをするときに立花先生に相談したら、積極的に協力していただいた。そのあと高見さんが口説き落としてついに代表にまでし

てしまったわけです。ほんとに植物の育て方からなにか非常に詳しいし、世界の植物を集めるプラントハンターとして有名な人ですから、すごいいい人が加わってくれたと思っています。

高見：ものすごく大きかったですね。ある意味夢とロマンみたいな話からスタートしてるわけだし。環境という意識は強烈にあったけど。でも素人でもなんとかなるだろうといったのが、立花さんが加わってくれたことで戦略ができた。最初に言われたのが、乾燥地帯にポプラを植えるなんて馬鹿なことはしてないでしょうと。吉良竜夫さんと梅棹忠夫さんが、沙漠に木を植えてはならないということをずっと言っておられて、そういう蓄積の中での話だったんじゃないかな、あとになって考えてみると。

有元：僕もはじめは日本の苗木をもって行って植えたらいいと思ってね。弟が農業関係の専門家だから紹介して少し送ったんですよ。ところが、日本の木がそこで育つはずがないと言われて。高見：いや、果樹はけっこうやってるんですよ。たぶんそのときもらったものだと思うけど、促成スモモが、地元のスモモより1ヶ月早くできておいしいので、いま接ぎ木でひろげようとしているところなんです。

石原：山の木と果樹は別に扱ったほうがいいと思いますね。がんばってアンズを植えて成功しているけれども、あれは森ではないわけだから。人間に恩恵があるけど、それを支える緩衝地帯がいる。そういう発想がだんだん共有されてきてますね。だけど見事だな、この花。夢のようだね。村の暮らしは少しぐらいよくなったのかな。

竹中：大きな変化はないでしょう。経済格差というか、置き忘れられたという感じがいつ行ってもしますね。でもそれがGENの活動には、かえっていいんじゃないかな。大きな経済の流れがはいつてしまうと、金ぱっかりにいつてしまって、環境問題に目が向かなくなってしまうけど、そういう状態にまだなっていない。

有元：アンズを植える前は、年収800元ぐらいの村。そこに学校を建てるの

じゃなくて、果樹園をつくった。4、5年経ったら収益がでて、それが村をうるおして教育にも還元される。これがGENの協力の意義だと思うね。それで村から初めての大学生がでた。

石原：やっぱりドリームですね。やったらできると。お金だけでできるものじゃない、文化でしょうね。

竹中：だけど農村での12年の活動の中で一番感じるの、環境に対する意識が変わってきたことですね。これは大きいですよ、経済的なものは別として。一番の大きな足跡じゃないかな。有元：でもわれわれが協力してるころは点なんです。ネットワーク化できてないわけです。なんらかの方法で情報交換できるようにしないと。最初は僕らが仲介してでも。携帯電話もあるわけだし。

石原：町の名ねをするような文化をおっかけるのはだめですが。しかし、若い人は農村は退屈かな、やっぱり。長坂：そうですね。ある程度学校に行けるようになって、都会の生活を知ったら、村で住めといわれたらきついんじゃないですか。

高見：ただね、食べることができれば残るだろうと思う。霊丘の上北泉村なんかは、若い人もたくさん村にいる。果樹で食べていけるから。

川島：貧乏な村では、早魃の年は出稼ぎに行く。むしろ出稼ぎに行ったほうが収入がいいんだけど、早魃でない年にはちゃんと村に戻っている。いつまで続くかわからないけど。日本もそうでしたけど、中国もどんどん人口が都市に移動している。そのなかでまだ、ちゃんと村に踏みとどまっている人たちがいるのは、ある意味救われますね。都市部と農村部の生活格差ってものすごくあるんだけど、農村でみんな生き

生きとじてる。簡単にひとつの文化にまとまってしまわないんじゃないかという印象はありますね。

石原：これは21世紀の重要な課題ですね。このままいくと地球上の人口は圧倒的に都市にいてしまう。だから私たちは、大地、土地に生きる意味、その文化、それはとても楽しいものであって、けばけばした浪費的なものとは違う、そういうことをおおいに論議しないとイケない。都市に人が集まって高層ビルができて、幸せになって、便利で、豊かで、子どもたちもバラ色かという、そんなことはない。凶悪犯罪もふえて、子どもたち大変ですよ。そういうこともふくめた論議をこれからしなければ。でもやっぱり、原点はエネルギー、太陽光をエネルギーに変えるわけですが、これがきっちりしないと、全部砂上の楼閣になりますね。

川島：そういうことからいうと、大同では水ですね。はじめは降った雨を貯められないか考えたんですけど、長年生活してきてそういう知恵では対応できなかったんだから、そう簡単な話ではない。川の水がなくなって河川敷が畑になるほどだし、地下水位がどんどん下がっているとも聞かしく、農業用水が制限されているし、非常に厳しい。

首都の水だって、どこまで確保できるか。どんな対策を講じて、水の消費自体が、工業化していく中でどんどん増えていく。そうすると生態系そのものが破壊されてしまう、生き物が暮らす世界ではなくなっていくような破綻があるんじゃないか。それを回避できる見通しはない。

大同の暮らしは、ものすごく水の消費が少ない。日本の生活の1/10ぐらいの水で暮らしていて、それがごく当たり前です。外部では、工業化がすすんで、資源浪費の、生態系破綻の世界へ行ってしまう危険性がある。一方で、そこへ行かないで農村で暮らしている人たちもいて、これからどうなるのかはほんとに見えない。

石原：乾燥地帯で、大阪みたいな水浪費生活はできませんよね。向こうは長年水を大事につかう習慣ができてるわけだから、それを大切にしないと。乾

燥地に生きるには乾燥地での水収支、違う方程式をたてるつもりでないと。水があるところはおおいにつかったらいいんですけどね。

竹中：循環経済の基本は水でしょうか。水をいかに循環するか考える必要がある。いま環境林センターでもやっていますけど、少ない水をいかに循環して2度3度つかうか。それが最大のインフラ投資だと思んですが。

石原：しかし、儲からないと投資しませんからね。

川島：都市というのは地域を結ぶ交流、交換の場所として発展してきたんだと思うんですね。ところがいま国際化がすすむ中で、人が住みついていた地域を離れて都市に集まってくる、それがひとつの破壊だという気がしますね。

石原：その鍵のひとつは緑ですね。生態系が土壌水や地下水というわれわれにはよくわからないところに対して強力ななにかをもっている。あの黄土のどうしようもないところが、ある意味では変わる可能性がある。限界はありますがね。それと、農村では勝手に緑ができるんじゃないかと、人間がそれを見て、必要な手を入れないとイケない。そういうことが、人類にとって最も価値がある、美しく楽しくてお金も儲かるということになれば一番いいんだけど、残念ながら儲からないでしょ。

長坂：水でいえば、絶対量が足りなければ何度もつかう仕組みをつくることになると思いますけど。

高見：問題は農業です。農業に使う水はリサイクルできない。大同で、特に旱魃の年なんかは、灌漑ができるとできないでは数倍も収穫量が違う。いったん井戸を掘ると、井戸水がなくなると限り灌漑がやめられない。それに、今年も大同の冊田ダムの水を北京がとったんですよ。河北省の壺流河のダムからも、雲中ダムからも、全部で9,400万tぐらいとったんです。オリンピックを乗り切るためにもやるしかない。そういうことによってしか、北京のこれからの成立は無理ですね。

川島：水の循環というのは、汚れたものを洗い流して捨てるための場所だから、それが海にいったら蒸発してもどっ



環境林センターの汚水処理施設は水の小循環てくるという循環の中でありたいってわけで、その循環からはずして途中で何回もつかおうというのが無理な話で、技術的な問題じゃないですね。

有元：根本的には無理か。だからここ数年、緑化協力事業が水問題に直面しているわけだ。

石原：去年水フォーラムがありました。われわれは、水の循環の中に森林が入っているということを取り上げてほしかったのに、全然どこにも入らない。なぜかという、国連で森林フォーラムがあります、というわけ。やっぱりものすごく官僚的です。国連も大きく変わらないと。森は森、水は水なんて言ったら解決できない。

有元：海水の淡水化技術がすすんでるでしょ、すごくコストが高いけど。

川島：お金の問題だけじゃないですね。自然では、海水を蒸発させて循環させてるエネルギー源は太陽光です。それを人工的にやろうとしたら、そのエネルギー源は結局石油とか原子力エネルギーという話になって、水をえるために環境を破壊することになってしまう。

人は生態系の中で生きてるわけだから、そこから外れて生活しようというのは無理があって、生態系の中でできるのかということに落ち着くしかないでしょう。だから、大きな転換がいずれ来るだろうし、中国から野菜が入らなくなると、日本で自給する方が生態系としては合理的だと思いますね。日本の野菜を逆に中国に送るとか。長坂：生態学的にはそのとおりだと思うんですけど、実際に日本の農村地帯がどうなのかという、ほとんど壊滅状態です。僕がいまいる静岡の浅羽町はかなりいい水田地帯で、農業をやると面白いはずなんだけど、後継者なんて数えるほどしかいない。後はみんな農地を貸すんだけど、その地代が毎年

下がってるんですよ。もう2、3年したら、逆に貸し手がお金をはらうことになるんじゃないかな。そうなったら、耕さない農地がどっと増えるでしょう。

竹中：だけど農業も考えないと、食糧自給率は40%切ったんでしょ。

長坂：やる人が増えてこない限りは無理です。水もあるし、土地もいっぱいあいてるんです。家族経営では後継ぎがいらないので、農業と関係のない人が入って経営者として土を耕していく仕組みをどうつくっていくかですよ。

川島：ヨーロッパの労働力はかなり外国人が入ってきたし、日本だってけっこう入ってきてる。

竹中：中国人が来て日本でやってくれないわけだ。

石原：水問題の基本のところですね。緑が定着すれば、森林が水を循環させるという機能はありますよね。大きくはないだろうけど、プラスアルファであることは確かです。将来にむけて、そのことを繰り返し強調する必要はあるんじゃないかな。それをやらないで絶望的になってしまうのはよくない。

高見：ただ、最近言われるのは、少々植樹したってそれで雨が增えるということはない。降ってさーっと流れてしまったのを蓄えてならす効果はあるけど、一昔前にいわれていた森林が雨を呼ぶというのは神話だ、実証されないということになりつつあります。

石原：そこのところ、緑がなかったら流れていってしまうのが、そこで生き物の生きてる細胞、樹木がそれを安定化しているという機能がある。利用側でそれをどういうふうに見るかだね。

川島：蓄えるのは間違いないわけですから、それを平均化していくことはあるでしょうね。日本なんかは雨が多から、一気に流れないようにそこで蓄える。大同でも、夏の雨をある程度蓄えることは可能かもしれません。

高見：むしろ土のためっていう感じですね。黄土高原なんかでいえば。

有元：ところで会報の100号記念ということだけだね、あまり記事にならなかったことに、カウンターパートの交替があると思う。祁学峰というすばらしい人が昇進してよそへ行ったとたん

に、心配してた結果がでてきたわけです。そこで総工会にきりかえた。あれは非常に大きな出来事でした。

高見：あのままにしとけばつぶれてたでしょうね。新任の大同市青年連合会主席がどうしようもない男で、大同事務所のメンバーを入れ替えようとした。事務所の連中だってほんとにやる気をなくして、武春珍なんかもうやめたい、このままじゃつぶれられないって。石原：やっぱり人だものね。

有元：総工会との関係はどうなの。

高見：彼らは日本の労組と関係があります。日本の労組も環境問題をテーマにしていますから、緑化が入ってきたのは、特に中央の総工会なんかにとってはよかったみたいですね。それまでも日本から連合とかがきて、植林を何ヶ所かやっているけど、あとの管理がなかなかうまくいかない。そこに、10年以上の蓄積があるのが、北京からそう遠くないところにくるのは歓迎という感じです。今年の4月に中央の総工会の一行が大同を4日間まわりました。彼らとしても、大同を環境保全の事業のひとつの拠点にしたいようです。

有元：じゃあ総工会にかわって、いまのところ良かったわけだ。

高見：まあそうですね。これからどれだけ発展していくか。

石原：日本語の環境という言葉ははなはだあいまいで、生態学的な概念としての環境という言葉を整理する必要があります。日本文化のなかで、生態学的な環境という問題をどう位置づけ、どう生きていかとといったことはあまり論議されてこなかった。もうちょっと足下で、さっきのような、日本人が農業をしなくなったのなら外国から労働者を呼んでこようという発想ではなく、生きていくとはどういうことかをみんなが理解しよう。緑の森林やきれいな水、そういうところに生き甲斐みたいなものがある、それが日本の文化だと、そういうことを思っ「自然と緑」の活動をやってるんですけどね。

有元：いま話題になるのはクマです。それとあちこちの大洪水。エルニーニョとかいう一過性の問題と違いますよ。

石原：そうですね。地球温暖化というのは、何十年かかって平均して何度あがりますよ、という話だけじゃないんです。境界のところ、こちらにどかんとかつて経験したことのないような集中豪雨がおこったり、あちらでは寒冷化がやってきたりというような、そういうことが起こるんですね。

有元：あちこちで洪水が起こって、人命や財産が失われ、一方では大旱魃、熱波で死者がでて、日本ではクマが出没して。なんでこうなったんだと。

石原：陸上生態系の中でもっともたよりになる、複雑で安定して自動調節機能をもっているのは森林ですが、それをいままで伐りまくってきた。えらいことをしてしまった、いまからでも遅くないから気がついたところらいこうと、そういう試行錯誤の10年という貴重な体験を、中日両方の民衆がとにかく身体で刻んだ。ここからです。なにかある、やりがいはあると。

有元：9年前いっしょに木を植えた8歳の子が、いま17歳。この子がその気になってほしいね。そこに定着して、自分のライフワークとしてできるぐらいの森林とのかかわりを、その村でしっかりと育ててほしいですね。

竹中：彼らはほとんど村の外のことを知らないじゃないですか。僕らが時々行くのはやっぱり刺激なんですよ。今年もまた来たぞ、木を植えるってそんなに大事なことなのかなと。

有元：そんな青年がでてくる？

竹中：できますよ。全部というわけにはいかないけど、ツアーがよく行く村にはあると思うね。

石原：それは希望ですよ。変わるわけですから。学習するとは変わることなんだものね。孫文が民主と科学ということ徹底して言いましたね。GENには立花先生をはじめとする高いレベルのエキスパートがついてるし、肝心なところはおさえている。この点は、これからも大事にしていましょね。事実ですから、科学は。特別な、名人しかできないのと違って、誰がやってもそのとおりできるんだから。そういうことを通じて、きっと日中両国の文化として変わっていくと思いますね。

## JICA草の根技術協力事業委託

### 新しい苗圃の建設などはじまる



冬を前に急ピッチで第二苗圃の整地をすすめる

国際協力機構（JICA）の草の根技術協力の受託がきまり、8月20日から、プロジェクトがスタートしました。3年間で資金の上限は5000万円、初年度は1800万円ほどです。

中心になるのは、新しい苗圃です。これまで協力の中心になってきた環境林センターは、20haの面積をフルに使っていますが、すでに手狭になってきました。そのうえ、環境林センターの土は粒子が小さすぎ、富栄養化していて、広葉樹の育苗には適していますが、針葉樹の育苗には問題がありました。土壌改良も試みましたが、労力と費用がかかるわりに、効果はあがりません。新しい苗圃の建設がここ数年の課題として浮かび上がっていました。

大同県周土庄鎮牛家堡村に7haの土地を確保し、9月初めから整地作業をはじめました。大同市内から10km

よつとで、実験林場カサギの森に行く途中。正面に白登山（現在の名前は馬鋪山、13ページ谷口義介さんの寄稿参照）がみえます。もとは伸び悩んだポプラ「小老樹」の林でした。土には砂が含まれており、針葉樹の育苗にも適しています。日立建機の中国法人から贈られたミニショベルがここで大活躍しており、これ以上ないタイミングでした。

いま足早に近づく冬と競争しながら、整地、道路修理、管理棟建設、井戸掘りなどが急ピッチですすめられています。来年の春から、菌根菌の活用などさまざまな技術を駆使して、育苗を開始したいのです。来春のワーキングツアーは、この苗圃の立ち上げに参加できます。独自の苗圃が2つになることで、中国式に言えば「2本足で歩く」ことができ、より安定した事業運営が可能になります。

またこのプロジェクトには、土壌浸食・沙漠化を防ぐための植林と、小学校付属果樹園も含まれます。大同市北部の地域に配置します。

大同市は北京・天津の大都市、大経済圏と、華北の穀倉地帯の水源であり、風砂の吹き出し口でもあります。そのために早くから三北防護林＝緑の長城

計画、太行山緑化工程といった国家プロジェクトが展開されてきましたが、最近になって北京天津地区風砂源改善工程、首都水資源保護21世紀計画もスタートしました。大同の緑化が中国全体にとっても、大きな意義をもつことがわかります。

そのまっただなかで取り組むプロジェクトには、生態、社会、技術など多方面でのモデルになることが期待されています。さいわい、日本からもたくさんの研究者、専門家がこの事業に参画し、地元でもこの地域の林業の生き字引のようなベテラン技術が参加し、しっかりした協力体制ができてきました。10数年の実践で練り上げた経験と技術を十分にいかしたいと思います。この7月には風砂源改善工程に関する2市3省（北京、天津、河北、山西、内蒙古）の副市長・副省長クラスが参加する会議が大同で開催されましたが、視察の対象に選ばれた現場は3つとも私たちが協力をつづけてきたところでした。今後、このような役割がさらに重要になると思います。



（高見）ミニショベルが大活躍

## 2005 春の黄土高原ワーキングツアー予告

冬の寒さが厳しい黄土高原も、3月末になって凍りついた土がとけはじめると、植樹シーズンの到来です。

春は毎年大同市南部を訪ねます。霊丘自然植物園の落葉樹はまだ芽吹いていませんが、ずいぶん大きく育った様子を見ていただけることでしょう。そしてもちろん、村の人たちといっしょに木を植え、子どもたちと遊び、農家に泊まる。GENのワーキングツアーならではの体験です。

日程：2005年3月29日（日）～4月3日（日）  
往路CA928便（12時集合、14時出発）復路CA927便（13時着）飛行機の時間は航空会社の都合で変更になる場

合があります。  
費用：一般＝158,000円、学生＝148,000円（国際航空運賃、中国国内での交通費／食費／宿泊費、GEN年会費を含む。個人行動時の費用、旅券取得費用、空港施設使用料、航空保険料は含まない）。中国国際航空利用 関西空港発着 成田発着便利用ご希望の場合は航空運賃の差額9,000円が別途必要です。  
定員：30人  
申込み締め切り：2月17日（定員に達し次第締め切ります）  
申込み方法：GEN事務所まで応募書類をご請求ください。



## GEN自然と親しお会 比良山麓で間伐作業

比良山麓にひろがる馬ヶ瀬国有林で森づくりをしているNPO「自然と緑」のご協力、間伐作業を体験します。「自然と緑」は馬ヶ瀬国有林を「ふれあいの森」として植林や間伐などの森林整備や自然に親しむ活動を続けています。今回は初心者向けレベルの作業内容で、経験豊富な「NPO自然と緑」スタッフに指導していただきます。

「自然と緑」は植林・間伐以外にも炭焼き、しいたけ栽培などの山仕事にも挑戦しています。11月末の森はどんな様子でしょうか。作業後には森の楽しみも紹介していただけます。

日時：11月28日（日）10時～15時頃まで

場所：滋賀県比良山麓の馬ヶ瀬国有林

集合：午前10時JR湖西線「北小松」駅前

参加費：700円（保険料を含む）

持ち物：作業のできる服装、弁当、飲み物、手袋、雨具、タオル

定員：20名

申込み：11月25日までにGEN事務所まで

協力：NPO自然と緑

## GREENなんでも勉強会 大阪市下水道科学館見学

大同の環境林センターでは、小規模な汚水処理施設を建設しました。近隣の団地の汚水を処理し灌水等に再利用しておおいに役立てています。

一方、日本の私たちの暮らしでは、配水管に流して目の前から消えてしまった後の汚水がどうなっているのかご存じですか。下水道科学館は下水のしくみと働き、その歴史から最新の技術までをわかりやすく紹介しています。館長さんに案内していただき、質疑の時間ももうけます。この機会に見学して下水処理の認識を深めましょう。子

どもさんの参加も歓迎です。

日時：2005年1月22日（土）13時30分～16時頃

集合：13時30分に阪神本線「淀川」駅

参加費：無料（下水道科学館も入館無料）

申込み：1月18日までにGEN事務局へ



## 災害義援金窓口のご案内

台風23号、新潟県中越地震と大災害がつづきます。被災された方に、こころよりお見舞い申し上げます。東北電力総連のみなさん、復旧作業お疲れさまでした。阪神淡路大震災のとき、ライフラインの中でいち早く電気が復旧して、ようやく点いた電灯とTVにどれだけほっとしたことか。新潟のみなさんも同じだったと思います。

今回の新潟県中越地震は、雪国で冬のはじめにおこったことを考えると、今後の復興に困難が予想されます。全国からの支援が必要です。

日本赤十字社や共同募金会の窓口は新聞等でご覧いただけるので、NPO支援の基金をご紹介します。

新潟県中越地震ボランティア活動基金

NPO法人新潟NPO協会が開設しました。現地ボランティアセンターの管理費や長期的な支援をおこなうNPOの運営費などに使われます。

第四銀行白山支店 普通 1587567

口座名義：新潟県中越地震ボランティア活動基金

\* 第四銀行の窓口からお振込みの場合、手数料無料。

\* 受付期間：2004年12月30日まで

この基金に関する情報は、新潟水害

救援ボランティア活動基金（ブログ）  
<http://tatunet.ddo.jp/vkikin/>でご覧いただけます。

【NPO法人新潟NPO協会】

〒950-2101 新潟市学校町通3番町494-12 TEL/FAX 025-230-3353 URL  
<http://www.nan-web.org/>

関西では、日本災害救援ボランティアネットワークが募金をよびかけています。阪神淡路大震災を契機に、国内外の防災・災害救援活動をつづけている団体です。

郵便振替 00900-5-29560

三井住友銀行西宮支店 普通預金 7022161

双方とも名義はNVNAD国内支援口です。

【日本災害救援ボランティアネットワーク（NVNAD）】〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-1国際健康開発センター2Fひょうご国際プラザ内  
TEL. 078-231-9011 FAX. 078-231-9022  
URL <http://nvnad.or.jp/top.html>

\* \* \* \* \*

台風23号被災者への支援も、日本赤十字社などが募っています。こちらも冬の寒さが厳しいところです。今年もあと1か月あまり、被災された方に少しでも暖かい新年をむかえていただけるように、助け合いましょう。

## ご寄付・助成金

富士ゼロックス端数倶楽部・富士ゼロックス株式会社

緑の地球ネットワークの活動に対して、それぞれ15万円ずつ、計30万円のご寄付をいただきました。このご寄付は10年目になります。息の長いご協力、ありがとうございます。

日中緑化交流基金

黄土高原の緑化協力に対して、950万円の助成が決まりました。



## 植林と平和、そして心

美川 圭 (摂南大学教授)

9月1日～8日、摂南大学黄土高原ワーキングツアー7名、9月4日～9日、サントリー労働組合黄土高原ワーキングセミナー10名が大同を訪ねました。

今年のノーベル平和賞に、ケニアのワンガリ・マータリさんが選ばれた。彼女の「私たちが新しい木を植えるとき、私たちは平和の種も植えるのです」(英フィナンシャル・タイムズ)ということばを聞いたとき、私は今回の大同行きの旅が、まさにその一端をかいま見たものであったことを、即座に思い出した。

私たちは通常のルートではなく、大行山脈をバスでこえて、涇源、霊丘と2泊ののち、大同市中心部へと入った。そのあたりが、日中戦争のときの抗日拠点であったということを知りし

て、私はひとりの日本人として身の引き締まる思いであった。私の生まれる前とはいえ、同じ日本人の侵略の歴史はまぎれもない事実であり、しかももはや何の弁解の余地もない。被害者の心に深くのこされた怨みもまた、世代をこえて長く消えることはない。

そうした絶望的な私の確信は、2日目の上北泉村訪問での歓迎のなかで、静かに消えていった。そこはGENが小学校付属果樹園をつくった村である。村人たちによる太鼓と銅鑼の楽隊の音。沿道での踊りで私たちを精いっぱい歓迎することもたちの顔。私ははからずも小さな嗚咽をもらっていた。そして、はじめてこの運動の意義が理解できた気がしたのである。縁あって私たちのツアーに同行することになり、奇遇にも私と同室となった林野庁OBの相馬昭男さんの「人の心に木を植える」事業、ということばが身にしみた8日間の旅であった。

## 文人趣味の国際交流を聴いて

成果を上げるための法則は同じ

浅野 悟郎 (尼崎市)

10月4日、大阪市立総合生涯学習センターでJICA専門員の山形洋一さんを招いて開催した講演会には31人が参加。二次会も盛り上がりました。

タイトルと講師の山形さんの経歴から想像して、これは面白いぞと期待して講演会に駆けつけました。結果はやはりいつものGEN講演会のように期待どおりでした。私にとっては、国際的な仕事をされている山形さんも、市役所で苦闘している私も同じような体験を経て、同じような結論を得ているのだとうれしくなりました。

プロジェクトを推進するためには、現場第一線への若者(市役所では若者は少数ですが)の配置、彼が動きやすいようマネジメントクラスの配置、政策的な(政治的な)段階でのアドバイザーの配置など、国内で仕事をするときも同じです。これがなかなかできず現場討ち死にあるいは企画倒れということが多いのですが、

企画する段階からの現場調査の重要性も同じです。言っても聞いてくれない時は率先して現場に足を運びます。最近はインターネットで情報を集めるだけで分かったような気分になる人が多いことが気になります。情報が多すぎただけでは決断はできません。

援助対象国の幹部と、かつての宗主国であり幹部が教育を受けてきた欧米とが同調し、援助に行っているわが国のスタッフが孤立しがちな構造の中で、どのようにして味方を増やしていくかといったことも、まさに自治体職員が、議員、地域の有力者、市民活動団体、企業家といった様々な立場の方々の中で、いかに正論を通していくかということと通じるものでした。その時に文学的教養がとて役立つことも。

閉塞感の漂う日本では若者を鍛える場が少なくなったと感じますが、国際社会に飛び出し自らを鍛えていくことは、若者だけでなく中高年にとってもいい人生を歩むための絶好のチャンスなのだと納得した次第です。

## 黄土高原ワーキングセミナー参加報告

伊東 博之 (サントリー労働組合書記長)

サントリー労働組合としては、6回目となるツアーですが、私自身は初めての参加となりました。期待と不安を胸に……。というも過去の参加者は、ツアーでは白酒のキャンペー攻めにあうとか、トイレはただの穴だとか、風呂にはまともに入れないといったことばかり吹聴するくせに、絶対行った方が良くと皆が口をそろえて言うのです。いったいどんなツアーなんや?と思いつつながら参加しましたが、今ではすっかり自分も人にそう語ってしまう人になってしまいました。

感想を書きだすとときりがありません。とにかく毎日が面白かったというのが率直な感想です。黄土高原にここまで緑が根づくこと(もっと荒涼とした風景を想像していましたが)、交流した子どもたちのいきいきとした瞳、ホームステイした村で見た見事な星空、素朴でおいしい料理、異文化との接触、そして何よりも人々との出会い・交流、その一つひとつが胸に刻まれました。日本では、毎

日が忙しく、ややもすると視野が狭くなりがちなか、このツアーに参加して人として本当に大事なことは何なのか、会社人間としてだけでなく、親として、社会人としてどうあるべきなのかを考えさせられました。

サントリー労働組合一行は大同を離れた後、当社工場のある上海に飛んだのですが、上海は、東京も顔負けの大都会。昨日までいた農村とのギャップのすごさに中国の広さを感じました。どれが本当の中国なのでしょう。

何はともあれ、参加者一同大変感動しました。お世話になった皆様本当にありがとうございました。



2つのツアーの参加者たち。カササギの森で



黄土高原史話 〈22〉

## 天下分け目の白登山

谷口 義介（摂南大学教授）

去る9月5日、念願の白登山へ。

西麓から仰ぐと高さ300mほどに見えますが、独立峰ではなく、東に連なる采涼山の支脈で、丘尾が小高くなった感じ（写真）。その地点に、1992年建立の石碑あり（写真）。前200年、漢の高祖劉邦が匈奴の冒頓単于に包囲され、7日目にしてようやく脱出したところす。

ことの発端は、韓王信の移封にあります。

信は妾腹ながら戦国・韓の襄王の孫に当たる名門の出で、身長2m近く、かの項羽をも凌ぐ偉丈夫です。前漢が成立して5年目の春、河南の潁川に韓王として入封しますが、高祖は信が才豊かにして勇武あり、加えてその地に強兵が衆いのを警戒して、山西中部の太原に移します。北の匈奴に備えるというのが名目ですが、無論のよい厄介払い。むかつ腹を立てた韓王信、それならばと、より辺塞に近い雁門郡馬邑への国替えを願い出ます。この時点で、匈奴に通ずる意図があったとみてよいでしょう。その心事を見抜いた冒頓は、6年秋、大挙して馬邑を包囲。両陣のあいだを密使が往来しますが、それを察知した漢は信に二心あるを疑い、使者を送ってきつく問責。聞き直った信は匈奴に降り、兵を合わせて南下、句注山を越えて、太原に攻め入ります。

7年冬、高祖は親征して、信の軍を銅鞮で破り、信は匈奴の地に遁走。その残兵と匈奴の1万騎が再度南下して晋陽を衝きますが、漢は大いにこれを破って離石まで追撃します。

匈奴は次に兵を楼煩の西北に結集。漢が一部隊をやって攻めると、匈奴はもろくも敗走しますが、これは敗走と見せかけて誘い込む冒頓の作戦に他ならず。時あたかも嚴冬とて、凍傷により指を失う者、漢兵のうち十に二、三にもかかわらず、太原にて勝報をえた高祖、全軍を繰り出し、歩兵を32万

に増員して、しゃにむに匈奴を追撃、長駆して平城（大同）に至ります。後続の歩兵はまだ到着しておりません。ここぞとばかり冒頓単于、精兵40万騎を結集して猛攻をかければ、一敗地にまみれた高祖、兵をまとめて白登山に逃げ込みます。この時、寄せ手の騎馬はと見てやれば、西面が白馬、東方に青ぶち、北側より黒馬、南から赤みがかった栗毛。びっしり囲んで、蟻一匹這い出る隙間もありません。

攻囲7日。山上に孤立した漢兵には、水なく食糧なく、今やギリギリの限界といったところ。そこで高祖に窮余の一策、ひそかに単于の正後にまいないし、その口添えで包囲の一角を開けてもらいます。ようやく主力と合流しますが、結局韓王信はとり逃がし、惨憺たる負け戦さ。一方冒頓は、悠然と馬首を北へめぐらせませす。

漢にとっては「平城の恥」といわれる白登山の戦いです。

以上、司馬遷の『史記』高祖本紀・韓王信列伝・匈奴列伝の記述に拠りました。

しかし、冒頓はなぜ囲みを解いたのか。

父を殺して単于となった当初、冒頓に対し東胡の王は強勢を恃んで愛妃の1人を所望しますが、「隣国のよしみ」と、いとも簡単に与えています。まして戦さに関わることで、正後の言とはいえ、英主冒頓が耳を貸したとは思えません。

実は、匈奴の側にも事情あり。来援を約していた韓王信の2部将がなかなか参陣せず、もしや漢と通謀しているのでは、と疑っていた矢先です。そこで正後の言を容れ、囲みを解いたという次第。匈奴列伝に述べるところです。しかし、匈奴の鉄騎40万がたかが2部将の軍をあてにするほど、高祖にてこ



ずっていたとも思えません。東方のなだらかな傾斜の側から攻めれば、自在に騎馬を展開できます。白登山は決して要害の地にあらず、いっきよに攻め落とすことが可能です。

ここに一説あり、陳丞相世家に見ゆ。高祖は陳平の奇計を用い、正後に使いをやって、そのため囲みが解かれたが、その奇計は秘密にされ、世に伝聞するところはなかった、と。では、その奇計とは如何なるものぞ。

『史記』の注は桓譚の『新論』を引いて、陳平が正后に向かい、「漢には美女多し、単于が漢を併せた暁には、云々」と、不安をあおった話を紹介しています。しかし、これは眉つばもの。

月並みな解釈ながら、匈奴が囲みを解いたのは、漢側から莫大な利を引き出したからでしょう。包囲7日の間に、ジワジワ条件をつり上げていったのではないか。その内容が余りに屈辱的だったため秘密にされ、さまざまな雑説を生んだのかもかもしれません。

# 関東 brunch の「これまで」と「これから」

上田 信・松永 光平・村松 弘一

## これまで

関東を中心に会員が集まる場を作ろう、そんな話題が最初に出たのは、1996年春のワーキングツアーの帰路でのこと。当時、法政大学の学生であった工藤寛之さんと私（上田）が、大阪でツアー解散した後に東京まで同行しました。話はツアーのできごとから、宮崎アニメの批評まで尽きることはありません。こんな話題の渦にもっと多くの人を巻き込もう、ということになったのです。さっそく GEN の幹から芽吹いた「枝」ということで、「brunch」という名をつけて、関東在住の会員にあてて大量のはがきを印刷。第1回は言い出しっぺの上田が話題提供。立教大学の300人収容できる大教室を確保したのですが、いざ開場してみると、参加者は工藤さんと妻（茂田井円）だけ。めげずに月に1回のペースで続けているうちに常連が現れ、しだいに軌道に乗り始めたのは1年後のことでした。その後、筑波山での自然観察会、伊豆での勉強会なども企画し、高校生から還暦世代まで多様な人を巻き込みながら現在にいたっています。（上田）いま

2004年は4月より学習院大学東洋文化研究所に会場をうつして原則として毎月定例会を開いています。黄河流域周辺の自然と人間とのかかわりについ

て、過去を探る試みから現在の取り組み、また未来への展望まで、幅広く学び合う場となっています。（表参照）

また、イベント参加を通じた広報活動も関東 brunch の特色で、4月29日のみどりの日には「みどりの感謝祭（林野庁主催）」、10月2・3日には「国際協力フェスティバル（共催：外務省、JICA、JBIC、国際協力NGOセンター）」にて橋本さんの写真を中心に展示をおこないました。特に10月は新しい試みとして三択クイズを導入し、日本や中国沿海部との比較を通じて大同の農村生活の現状について実感していただけたものと思います。

関東 brunch のいまの悩みは、新しい参加者がなかなか増えないことです。机上の勉強を行動に結びつけていくことを見据えて、上記イベントでのアピールに加えて、他 NGO との提携や大学での広報活動などを考えているところです。アイデア・参加者大募集です！（松永）

## これから

関東 brunch がはじまって8年。今年も順調にほぼ毎月の会合を開いています。これからの夢は、黄土高原に関する自然・歴史・文化・社会などをあつかった書籍を共同で製作したり、関東 brunch 黄土高原ワーキングツアーを企画したり、中国における緑化活動

をすすめているほかの NGO との意見交換会やシンポジウムを開催したり、また足元の自然とふれあう機会を提供したり...とにかく、黄土高原の砂漠化・緑化・水に興味をもつ人たちがあつまるとして、そして、ツアーに参加された方々が日本でも引き続き大同の緑化にかかわることのできる窓口として機能できればと思います。（村松）

\* \* \* \* \*

<表・2004年関東 brunch 月例会>

4月 長谷川順二さん（学習院大学大学院）

「前漢期黄河故河道の復元～処理画像と現地調査～」

5月 市来弘志さん（学習院大学・講師）

「統万城とオールドスの環境変遷」

6月 是常知美さん（東京大学大学院）

「年輪幅・<sup>13</sup>C測定による中国黄土高原に生育する樹木の耐乾特性」

7月 北村裕子さん（北京環境ボランティアネットワーク・BEV-NET設立者・副代表）・尾藤健太郎さん（同副代表）

「BEV-NETよもやま話 2000-2004」

9月 是常知美さん（東京大学大学院）

「黄土高原で過ごした5日間」

10月 和田鈴子さん（FoE Japan）

「草原の回復をめざして 内モンゴルでの緑化活動」

## 黄土高原で過ごした5日間

9月7日～14日に中国黄土高原中北部で植生調査やサンプル採取などをおこないました。その様子を、修士論文の内容をまじえて、9月25日に学習院大学東洋文化研究所でおこなった関東 brunch 9月の例会で話しました。

まず修士論文「年輪の<sup>13</sup>Cからみた中国黄土高原に生育する樹木の耐乾特性」について。<sup>13</sup>C（炭素安定同位体比）を調べると植物の気孔の開閉

是常知美（東京大学大学院）

の状態がわかります。気孔が開いていると光合成が活発で成長は早いのですが、水分蒸発量が多いため乾燥に弱く、閉じているとその逆になります。

植林に多用されるアブラマツとニセアカシアの生理生態特性を調べたところ、アブラマツは耐乾性が強いが成長は遅く、ニセアカシアは耐乾性が弱い成長は速い樹種であることが分かりました。この地域には耐乾性の強いア

ブラマツの方が植林に適していることが示唆されました。

次に黄土高原での滞在の様子を話しました。年降水量が400～450mmの黄土高原から砂漠への移行帯に位置する陝西省北部の榆林市と米脂県で、植物・土壌サンプル採取や植生調査をおこないました。印象的だったのは、1953年から植林をしている高西溝という村です。50年代は合作ポプラ、ニセアカシアなどを植えていましたが、現在は小老樹（水分の不足により樹高成長が頭打ちとなった樹木）になって、

## 雲南だより〔2〕 月餅騒動

茂田 井 円 (GEN関東ブランチ)



50円)程度です。でも普通の餅系菓子が1キロ8元ぐらいなので高額には違いありません。さらにデパートを覗くと美しい木箱の中に、月餅とともにウイスキーやワイン、はては琴まで入れて売っていました。中秋節の折に知人に月餅を送りあう風習は伝統的なものです。それが近年、過熱するのは中国が自由化したためにつけとどけが欠かせ

なくなったのでしょうか。中秋節の当日。日中は休日でもないのに例の大きな箱を抱えて、街を闊歩する人を大勢見かけました。夜、美しい月に誘われて家族で近くの公園を散歩すると、子どもは手に提灯を、大人は月餅、果物、ゆで枝豆、お茶などを

持ってそぞろ歩いていました。その日は夜遅くまで市内各所で渋滞したそうです。翌日、街を歩くと、道端には月餅の包み紙が落ち、ごみの集積所には、あの美しい箱が沢山捨てられていました。その日の新聞によると、売れ残った月餅は昆明で500トンあり、廃棄したり豚のえさにしたりするそうです。また複数の人から月餅をもらう家では、毎年、家族で新年すぎまで月餅を食べ続けても食べきれず、最後には捨ててしまう、との談話が紹介されていました。

商戦は8月初頭に始まりました。新聞では、ほぼ連日、月餅特集が組まれ、菓子屋やデパートには特設コーナーが設けられ、早くも過熱気味です。月餅の利潤は200%にも達し、ホテルでは毎年、中秋節前の月間収入の20%以上が月餅の売り上げとなるそうです(『春城晩報』8月23日)

月餅一個の値段は一般には3元(約

入いて、特にニセアカシアは枯死しているものも多く見られました。修論から得られた、ニセアカシアは乾燥地での植林に適さないという結果と一致しており、研究者としては嬉しく思いました。70年代以降は植林により植生が回復し、現在は低地を畑として使い、山にはアブラマツやコノテガシワなどを植えているようです。

今後も黄土高原に生育する各樹種の生理生態特性を明らかにし、各地域に適した植林樹種を提案していきたいと考えています。

### 関東ブランチ12月例会 「黄土高原における環境協力 ～13年目にわかってきたこと」

日時：12月23日(祝)15時～  
場所：学習院大学東洋文化研究所  
会議室(JR「目白」駅徒歩5分)  
講師：高見邦雄(GEN事務局長)  
問合せ：松永光平(e-mail: pulsar  
@nenv.k.u-tokyo.ac.jp)



「子どもの頃の、あの小さな月餅のなんとおいしかったことか。かつて貧困と飢餓を経験した我々にとって、食べることには重要な意味があった。経済の発展で伝統節の内容が変わってしまったのだろうか」と憤る論説が印象的でした。

昔ながらの風習が急速な繁栄と複雑化する社会を反映し、あだとなってしまったようです。食文化の伝統が深い土地柄だけに悲劇はまだまだ続きそうです。

### 年末カンパのお願い

緑の地球ネットワークが1992年に活動を開始して、まもなく丸13年。

中国黄土高原での緑化協力活動を継続しているのは、ひとえに多くのみなさんの支えによるものです。おかげさまで2004年春までに4,570haに1,545万本の植林を実施しました。日本の専門家の協力と中国側スタッフの努力により、苗木育成・植林の技術も向上し、苗木は目に見えて成長しはじめています。大同に建設した関連施設もほかに充実してきています。最近内外の多くの見学者を受け入れ、この間培った経験を近隣の緑化に波及する大きな役割を果たしています。

今後はこれまでの基盤の上にさらに内容を充実させて、森をよみがえらせる努力をしていきます。

現在会員数は435団体・個人です。会員のみなさんには引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。まだ会員になられていない方はぜひ入会して活動に参加してください!

緑化プロジェクトのための緑化基金、日本での態勢を支える運営資金は金額自由で募っています。カササギの森協力金は1haの緑化のための資金5万円を1口とする募金です。

みなさんのご協力をよろしくお願いいたします。

今回、作業の都合上一律に郵便振替用紙を同封します。最近ご協力いただいた方には重ねてのお願いではありませんので、ご了解ください。



## 映画「蟻の兵隊」製作を 応援しよう！

「日本軍山西残留事件」……第二次世界大戦終結後、山西省に駐留していた約1万人の日本軍将兵が国民党に引き渡され、4年間国共内戦を戦わされました。戦後、日本政府により隠蔽され続けてきたこの事件の真相とは？「延安の娘」の池谷薫監督が映画化に挑んでいます。

この自主製作映画を、あなたも応援しませんか。寄付は1口1万円ですが、1口未満でもOKです。

郵便振替 00150-5-759735

加入者名 「アリの兵隊」製作委員会  
【「蟻の兵隊」製作委員会】

(有) 蓮ユニバース 〒151-0063 東京都渋谷区富ヶ谷2-44-10-504 TEL. 03-5478-6077 FAX. 03-5478-6078  
e-mail : gon-ren@wa2.so-net.ne.jp  
URL http://www.arinoheitai.com

## ポンカンをどうぞ

台風にまけずがんばったポンカンです。年末のご進物にも。

ポンカン (低農薬・有機栽培)

A	3L/2L	5kg	化粧箱	4,000円
B	"	"	普通箱	3,700円
C	"	3kg	化粧箱	2,600円

\* 当欄掲載のイベント情報は掲載時点のもので、その後変更になる可能性があります。主催者にお確かめのうえ、ご参加ください。

\* 当欄に情報をお寄せください。本紙は奇数月15日ごろの発行で、締切は前月の末です。なお、紙面の都合により掲載できない場合があります。ご了承ください。

D L 5kg 化粧箱 3,500円  
E " " 普通箱 3,200円  
出荷：12月ごろ～来年2月  
送料別途。関西630円、関東840円  
(20kgまで)

お申し込みは田中隆一さんまで。  
〒781-7411 高知県安芸郡東洋町甲浦  
TEL/FAX. 0887-29-2500

売上の一部をご寄付いただいているので、ご注文の際、「GENの紹介」と一言添えてください。

## 編集後記

おかげさまで「緑の地球」は100号になりました。記念号にして増ページだ、となったのはいいのですが、問題は何ページにするか。まあ、会報100号といってもそれがどうしたといえはそれまでだし、1枚増の12ページにしよう。そう決めて原稿依頼をすませました。ところが、送られてきた原稿をみると、長い(ものがある)、削りに削って、文字を小さくしてとどうあがいても12ページにはおさまりません。「あのう、16ページになりそうなんですけど……」。重さをはかって、郵送料が変わらないことを確認して、OKとなりました。お粗末さまです。

パソコン編集だからこそこんないい加減なことができるんですが、最初の

ころは、ワープロ入力、電算写植でした。行数を計算して、写真サイズをはかって、縮小率を計算して、紙面にきっちり配置して……。いまやれといわれても、とうていできません。

そのころの編集長、林靖介さんからメッセージをいただきました。

\* \* \* \* \*

100号おめでとうございます。今から10数年前、まだ準備会だった頃、機関誌「緑の地球」の編集作業をしていました。あの頃よく東川さんに手伝ってもらってました。正式発足と同時に事務局を離れ、全く未知の家具製作の道に転身しました。なんとか今日までやってこれたのは、GENの素晴らしい活動と、着実な発展を見ながら、僕も負けずに頑張ろうと思ってきたからです。

さあこれからもう一踏んばり、更なる展開を共に目指しましょう。

\* \* \* \* \*

林さんには、GEN事務所の表札の板をつくっていただきました。今度事務所にお越しの際は、じっくり眺めてみてください。

それにしても、今年は日本でも地球温暖化が実感された年でした。京都議定書が発効します。温暖化ガス削減は待たなし、できることから。(東川)